

昼寝するお化け

曾野 綾子

宮崎・鹿児島両県は、去年から今年にかけて、災害続きだ。口蹄疫で殺処分された牛と豚は約二十九万頭、最近では鳥インフルエンザも発生して、二〇一一年二月半ばの段階では、まだ被害総額を算定できないような緊張が続いている。早く収まってほしいのに、と願う気持は誰もが持っているはずだが、現場を知らない東京住まいの私などには、いまいち迫力をもって現場の苦勞が伝わって来ていないのは申しわけないが、マスコミの怠慢にもその原因はある。人間が肉類を食べる、ということ、は、考えてみれば残酷なことだ。インフルエンザに罹った鶏を大量に殺処分すれば、極端な鶏肉の品薄がおきるのではないかと私は思っていたが、鶏のプロイラーは、ほんの生後四、五十日で出荷できるようになる



●Illustration / 井筒啓之

菜っ葉よりも早く商品になるのだ。私は常に庭に菜っ葉を撒いて育てているが、それでも季節と品種によっては四、五十日以上かかるものがある。食肉用の鶏の生涯はたった四、五十日と聞いて、動物には過去と未来の観念がないというから、それでいいのかもしれない。やほりかわいそうに、という感傷は拭い切れない。私はもちろん肉料理も好きなのだが、それは牛、豚、鶏が既に肉の状態になっているからである。つい三年前、マダガスカル島の田舎では、日本からの寄付で小学校ができたお祝いに、牛を一頭村人に振舞った。校庭でもあ

「現場を見よ」

り修道院の敷地の一部でもある空地で、牛一頭を屠ったのである。百人近くの子供たちも物珍しさに眺めている。私たちも同行していた日本人の熱帯病の研究者のドクターたちも牛の解剖は見たことがないと言って熱心に見学している。私は何度か外国で、日本食を食べたがる日本人のために親子丼を作りますが、と言ったのだが、その後で「しまった」と思ったことがある。その国では、食材はまだ生きた鶏のまま台所の外に運ばれて来るので、鶏は殺して肉にする作業から始めねばならない。他人が締め付けてくれるにしても、断末魔の鳴き声を聞くのは辛い。

肉を食べるなら、少なくともその工程を人生で一度くらいは正視するのが人間の義務だろう。東京の虎ノ門にある財団で働いていた時、私は

途上国援助もする職員に、一度は鶏を殺す現実を教育的に体験させるべきだと思っていた。しかし財団の建物はわずか八階である。周辺のビルはすべてもっと背が高いから、隣のビルから見ている人が「あの財団は実に残酷だ。屋上で職員に鶏を殺させている」と苦情を言うに違いないと思って実行に移さなかった。だがほんとうは、人間の行動と意識は首尾一貫するように教育するべきだった。肉を食べるなら、動物が肉になる過程から眼をそらしたままでいるというのは、卑怯である。人は善ばかりするのではない。時には悪もして生きるのだが、その悪を、せめて意識してするのが人間の責任というの

と可愛がって育てていた牛が、子牛まで連れ去られて殺処分になる哀切な思いを述べていただけで、決して殺処分の作業がどれほど大変なものかは書いていない。恐らく現実を書けば、そんなむごいことを記事にするなんて……という読者からの非難の投書が来るかもしれないことを恐れて触れなかったのだろう。ほんとうは当然知らせる義務があるのだが、つまり日本のマスコミには、報道人としての毅然とした勇気が、最近ではなくなっている

もっとも殺処分の頭数の多かったのは川南町十萬頭、高鍋町三萬頭、木城町二萬七千頭などだったが、こうした家畜を埋める作業が可能だったのは、地元の土木・建設業者の協力があつたからだという点に触れてくれている。当然の視点だが、一般のマスコミは一向にライトを当てなかつた面である。

好評連載 ESSAY 458

宮崎県建設業協会は約四か月間に一万二千人を動員した。使われた膨大な重機や装備の数も、私はこの新聞の記事で初めて知ったのである。それによると、

の苦勞も知らず、自国に自信も持たない。地震の後のハイチで、丸一年が経ってもまだ廃墟の中の小屋で暮らしている人々がいることは、テレビでも報じられた。原因は、国の中に、人力では除去できない重くて大きな瓦礫を取り除くことの可能な重機が十分に保有されていないからである。

今や都心にも進出しつついている言わずと知れた総合衣料品小売業！

2大チエーンの、勝ち抜いた理由。

地方の同じ町(埼玉県小川町)に生まれた「しまむら」「ヤオコー」は、なぜ成功したのか？

しまむらとヤオコー

小川孔輔 著

「地方発の企業が強い理由は本書を読めばわかるだろう」柳井正

小学館愛読者サービスセンター

献立提案などが大人気。埼玉発の食品スーパー。21期連続増収増益中！

小さな町が生んだ2大小売チエーン

好評発売中!!

「地方発の企業が強い理由は本書を読めばわかるだろう」柳井正

小学館